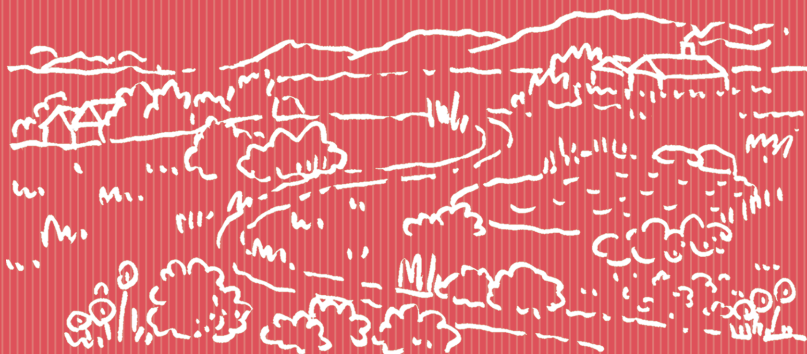


ばんけい

教育ほつとにゅーす
かわら版こ みち
教育の小径 No.106
2017 August
8月号国士舘大学教授
北 俊夫先生

今月のひとば

ひんこうほうせい
品行方正

品行とは道徳的に見た行いのことです。方正とは心や行動が正しく、人の模範になる人柄のことです。行いに品があり、正しいことをいいます。

夏季休業中に取り組みたいこと

- 年度当初に作成した学級経営案に照らして、現在の学級の状況や課題を点検・評価し、2学期からの方針と改善策を考えます。
- 2学期はさまざまな学校行事が目白押しです。段取りよく進行するように工程表（ロードマップ）を作成し、見通しを立てておきましょう。

今月の
記念日野球の日
(8月9日)

「8（や）と9（きゅう）」の語呂合わせです。この時期は全国高校野球大会が開催中ですから、野球に対する関心が高まります。ちなみに、6月19日は「ベースボール記念日」です。

学級経営案の見直しと改善

本年度の始めに作成した学級経営案がその後十分に生かされていないという声を聞きます。学級経営案は作成することに目的があるのではなく、よりよい学級経営を展開することに生かされて意味をもちます。そのためには不連続の見直しと改善が求められます。

夏季休業中は、学級経営案に照らしてこれまでの教育活動を振り返る絶好の機会です。通常、学級経営案には学級目標をはじめ、学習指導や生徒指導の方針、個に応じた指導や家庭・保護者との連携などの項目を設定して、4月時点の学級経営に対する担任の思いや願いが表現されています。

各項目ごとに、現時点でどのような状況なのか。どの程度実現されているか。どこに改善すべき課題があるかなど、点検・評価することは学級経営をよりよく進めていくために重要な作業だといえます。その際、子どもたちの育ちの具体的な姿を思い起こしながら振り返ることがポイントです。

もし、年度始めの方針などに問題点があった場合には思い切って方向を転換することも必要です。これは実態を踏まえ、「PDCA」のサイクルにもとづいて、よりよい学級をつくるため

にマネジメントすることです。

普段はじっくり時間をかけて振り返ることができないものです。比較的時間的な余裕のある夏季休業日を利用して、2学期からの学級経営をリフレッシュしたいものです。

これからの教育活動に見通しを

2学期はさまざまな学校行事が目白押しです。行事の分散化は進んでいるようですが、多くの学校では運動会が実施されます。修学旅行（移動教室）や展覧会、学芸会、音楽会、学習発表会などが計画されている学校も多いでしょう。他校との連合行事が組まれている地域もあります。2学期は研究発表会の季節でもあります。発表校では研究成果のまとめや公開授業の準備に追われます。2学期制をとっている学校では、10月に入ると学期の区切りの行事があります。

「行事に追われて、落ちついて授業ができない」という声を聞くことがあります。2学期は年間で最も授業時数の多い期間です。子どもたちの学力を向上させる重要な時期だといえます。授業と行事の両者の充実を図るためには、教師自身が先の見通しをもち、心の余裕をもって取り組むことが求められます。忙しいという語句の「忙」は

「心が亡ぶ」と書きます。

この夏季休業日を利用して、2学期に取り組む主な行事等を書き出し、そのためにどのような準備が必要になるのか。およその工程表（ロードマップ）を作成してはどうでしょうか。先が見えてくると、心にゆとりが出てくるものです。意欲も高まってきます。

「待ってるよ」のひと言

長期休業日のあとには不登校の子どもが増えるというデータがあります。生活リズムが崩れている子どもや、日ごろから気になる子どももいます。

それらの子どもたちには、夏休みの終わりごろに「2学期から元気を出てくるのを待っているよ」のひと言をかけたくなります。手紙を書く方法でも電話をするのもよいでしょう。場合によっては家庭訪問することも考えられます。私ごとになりますが、2学期を迎える1週間ほど前に、一人一人の子どもに葉書を出したことがあります。内容は、課題の進行状況について確認し、9月にみんなと会えることを楽しみにしているというものでした。

子どもと関わりをもつことにより、担任の愛情が子どもやその保護者に伝わるものです。こうした心遣いが2学期からの教育活動に生かされます。

学校の危機管理

自然災害——地域を知る

東日本大震災では多くの犠牲者が出ました。特に海岸沿いの地域は甚大な被害を受けました。内陸の学校から異動してきた教員が多かった学校では犠牲者が多かったといえます。

子どもを自然災害から守るためにはその地域でこれまでにならぬような災害に見舞われたのか。そのとき、どのような被害を受けたのか。また、今後どのような災害が起こりうるのかを理解しておくことが重要です。子どもたちが生活している地域を地理的、歴史的な観点から理解することは教師として必須のことです。

教師は3年から6年ぐらいの幅で異動します。初めての地域に異動したとき、その地域の知識がほとんどない場合もあります。子どもの生活舞台である地域に対して未知であるということを経験している人もいます。子どもたちのほうが知っている場合もあります。

教師が地域理解を深めることなく、地域に密着した教育はできないともいわれています。お年寄りなどその地域の人たちから話を聞くことによって地域理解を深めることができます。できれば、地域と一緒に歩きながら、石碑を訪ねたり地形を確認したりするとよいでしょう。地域防災に取り組んでいる人や消防団、自治会などの人から、これまでの取り組みの状況や歴史を聞くこともできます。砂防工事事務所や防災館などの施設が近くにある場合には一度訪ねてはどうでしょうか。

子どもたちを地震や津波、土石流や土砂崩れ、火山の噴火などの自然災害から守るためには、まず教師が地域を理解することが大切です。

教育の動向



教育機会確保法

文部科学省は、4月に不登校の児童生徒等への支援のあり方について基本指針を取りまとめました。内容はすでに教育委員会に通知されています。これは不登校児童生徒の教育機会を確保することなどを目的に、昨年12月に成立した「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」（教育機会確保法）にもとづいて策定されたものです。

基本指針では、不登校児童生徒等に対する教育機会の確保について、児童生徒が不登校にならない魅力ある学校づくりを推進することを基本に据え、

不登校児童生徒の社会的自立を目指すこと、不登校というだけで問題行動であると受け取られないよう配慮すること、児童生徒の意思を十分に尊重しつつ、個々の不登校児童生徒の状況に応じた支援を行うことを求めています。

不登校児童生徒に対して、フリースクールなど学校外の民間の施設や団体との情報共有など連携・協力を重視しています。そのために、不登校の理由や支援内容などを記述する個人カルテ「児童生徒理解・教育支援シート」を導入するとしています。これは学ぶ場や機会を学校外にも多様に確保することを求めているものです。

また、いじめによって不登校ぎみになった児童生徒については、緊急避難策として欠席が容認されます。

シリーズ 研究授業の目 12のポイント 10

本時のまとめはどうか

本時（45分間）の授業は、大きく「導入—展開—終末」、あるいは「今日のため—調べる—まとめる」といったステップで展開されています。本時の終末に位置づく、学習の成果をまとめる場面は子どもにとっても教師にとっても重要な意味をもっています。まとめることなく終わっている授業は論外ですが、次のような終わり方をしている授業をたびたび散見します。

それは今日の学習について「学習感想」を書かせて終わらせている授業です。どんなことを書いても感想になります。「今日の授業は面白かったです」「いつもより長く感じました」など子どもは率直な感想を書いてきます。こうした記述は子どもを理解するには重要な情報になりますが、終末にはもっ

と重要なことを見きわめる役割があります。それは本時の目標（ねらい）が一人一人に実現したかどうかを点検し評価することです。

そのためには、学習感想を書かせるまえに、今日の学習のため立ち返って、わかったことや考えたことを書かせるようにします。このことによって、教師は評価の材料を得ることができ、一方、子どもは今日の学習成果を確認することができます。まとめたことを発表し合うことによって、つまずきや足りないところに気づかせることができ、学び合う機会になります。

授業の観察者は、本時の終末で目標が実現できたかどうかを注視しています。本時の学習をまとめさせるとき、何のためにまとめる場面があるのか。まとめさせる目的は何かを押さえたまとめさせ方を考えたいものです。

INFORMATION



新教育の分析と授業改善のための必携書

小学校 指導資料PART33

新学習指導要領改訂の要点

■企画・編集／(一財)総合初等教育研究所 ■規格／A4判 本文2色 272ページ
■発行／株式会社文溪堂 ■定価／1,500円(本体1,389円+税)

編集後記

自然災害に備え、防災マニュアルの整備や避難訓練などの対策が必要だといわれています。まずは地域理解を深めることの大切さを学びたいと思います。

(F記)

企画・編集：ぶんげい教育研究所
発行：株式会社文溪堂
発行日：2017年8月1日